

ワーグナーの作品についての考察

川越 守

抄録：このレポートはワーグナーの楽劇「ニーベルングの指環」についての記述である。オペラの筋道は長大・奇天烈（キテレッツ）であり、これを解説するところからはじめた。私的な見解も書き加えてある。これに、ワーグナーの作曲法、オペラの指揮法、オペラの演出上の問題点などを書き加えた。なお、実際に、このオペラを上演したので、この終演後のことを追記として記した。

“ワーグナーの大作、楽劇 (Musik drama) 「ニーベルングの指環」についての私的見解”

1. 序

北海道交響楽団（札幌にある社会人の集団によるオーケストラ、音楽監督 川越 守）では、今年の10月に創立30周年を記念して、ワーグナーの「ニーベルングの指環」を取りあげることにした。もっともちゃんとしたオペラの形では出来ないの、よい部分を抜粋して集め、演奏会形式で行うのである。

このオペラは全曲15時間ほどかかり、四日かけて行うように出来ている。序夜、第一、第二、第三夜というように。ワーグナーが以前から従来のオペラについては批判的で、これこそ本当のオペラだと正面きってこしらえて来たものである。

ワーグナーはドイツ中世の叙事詩に目をつけていた。これが基になってこの大作が出来上ったのである。12、13世紀のライン地方や、北欧の伝説をうまく使ったのである。ドイツ文学として成立しているのではないのか。この楽劇の台本内容こそ、ロマンそのものではないのか。ワーグナーは話をまとめると同時に、ライン地方の素晴らしさや、ライン河の雄大さを音楽にしておきたかったのではないのか。

ライン河のほとりの「ボン」という町から上流の方に、多くの伝説があるという。「ローレライ」がその一つだが、19世紀の中頃、ハイネがその詩を書き、ジルヒャーが作曲して歌が出来た。日本には明治時代に女学生むきの唱歌として入ってきている。ローレライという乙女が岩の上で「魔の唄」をうたい、それにつられていった船は岩にぶつかり、しずむというのである。おそろしい伝説である。

ニーベルングの物語は、とてつもない話しだが、ワーグナーが楽劇を作るのには、これらの伝説はもってこいのものであったのだろう。とにかく、立派な堂々とした音楽が、伝説を集めた話しに作曲されていて、話しは「どうでもよくて」この音楽そのものに人々ははまってしまうのではないのか。音楽を聴いていけば、これは劇の内容をよくあらわしていてドイツ音楽の素晴らしさを十分に発揮していることが理解出来る。私は今回、道響を指揮することで、このオペラについていろいろなことが分かった。ここに、そのことを記述することにした。私としては、この楽劇の話しの内容にはついて行けないのだが、神の時代だというし、それほど詮索することもないということで、今では、この話し

になれてしまっている。この音楽を聴くと、ブラームスもかけがえがうすくなってしまうように思える。

2. 私見をまじえて物語りの筋を書く

このオペラは、ワーグナー自身が台本を書き、それに作曲したもので、全曲の出来上りに 25 年をついやしている。よくこんな話を組み立てたものであると感心する。解説書など、一度位読んでも理解出来ないほど複雑な内容を持つ。不思議な登場人物が沢山出て来る。まあ、これがあって音楽が作られたのである。要するに、楽劇の材料としてもっとも適したものであったわけである。

時代は神代だが、人間くさい神様の集合体が天上界にいる。ほかに地上の人間（神が作った）、ニーベルング（死の国）の小人族、巨人族も出て来る。ヴォータンという大神様（神々の長^{オサ}といってよい）が出て来るが、この神様がいろいろと画策することで、芝居は進んで行く。このヴォータンには「本妻」がいるのだが、妻ではなくて智の神エルダに、なんと 9 人もの娘を産ませている。彼女等はワルキューレと呼ばれ、戦姫（イクサヒメ）として活動している。この神の子たちは馬にのって空をかけめぐり、きづついた勇士、死んだ者を助けてヴォータンの城につれてくる。ヴォータンはそれを自分の兵士に再生するという。ヴォータンは戦の神様か？これは、いかにもドイツ的なのか！一番上の女の子が主人公の一人、ブリュンヒルデである。

ヴォータンは世界制覇をめざして、自分が手を下さずに、他の者にライン河の底にあった黄金で作った指環をとって来させようとした。人間の女に 2 人の子供を産ませている。不思議なことに双児の男と女がこの世に生まれ出る。ヴォータンもいろいろといそがしい！

男の方はジークムントといい、女はジークリンデと名付けられた。この男の方は、ある時、父親のヴォータンといっしょに戦いに出て、そのうち親からはなれてしまい、武器の刀もなくなったという。ここ迄、時は十分に過ぎているのだが、どの位たったのかは不明である。

ジークムントは、武器もなしに山賊の親分（？）のような者のいる家に助けを求めて入って行く。たまたま、そこに素晴らしい女性がいて、彼は一目で彼女にほれてしまう。この女が、ジークリンデであり、ここで、兄と妹が会うことになる。彼女は、この家のフンディングの妻になっており、又、下女のごとくあつかわれてもいるという。フンディングには「手ごめ」にされてそうになったという。ジークムントは彼女が自分の妹だと知ってびっくりする。まことに不思議な話しを作り出したものである。これは、伝説にあるのかどうかは分からない。

話しは続く。ジークリンデはジークムントに次の様な話しをする。フンディングの家で宴会があって、その途中にへんな男がやって来て、トネリコの木の下に剣を突きさしたという。これが抜ける者はただ一人、英雄しかいないといって去る。つまり、英雄ジークムントなら抜けるというのである。剣をさしていったのはヴォータンである。何かへんなおはなし！

とにかくここでの二人はむすばれる。兄と妹の結婚ということになる。ジークリンデは身ごもり、この子がジークフリートというおそれを知らない若者に育って行くことになる。

ジークフリートを育てたのが、なんと小人のアルベリヒの弟のミーメで、しかし、ジークフリートとミーメはうまくいっていない。ジークフリートは、このミーメを父親だと思いたくないのである。筋の途中で、ミーメが父親でなくてよかったと安心しているところがあるが面白い！ジークフリートは母親を求めている。彼の母親はジークリンデだが、ジークフリートを産んですぐに死んでしまった。父親のジークムントはフンディングと戦ってすでに死んでいる。「男の子を産むと、人間の女はすぐ

死ぬのかな」とジークフリートはつぶやくところがあるが、なにかさびしい。要するに、今迄の人達は、皆、血縁なのである。ヴォータンにはじまり、9人のワルキューレ、そして、二人の兄妹、ジークフリートはヴォータンの孫なのである。

さて、ブリュンヒルデはどうなっているのか。彼女は、ヴォータンに双児の兄妹と一緒にさせるなと命令されており、戦いの場では、フンディングの方に味方するようにといわれている。フンディングとジークムントは刀であらそうことになっているのである。しかし、彼女はその命令にそむき、この二人のためにフンディングを倒す方にまわる。実は、ヴォータンもはじめは、この双児の味方であったのだが、奥さんのフリッカ（結婚の神様）に血族結婚はだめだと強くいわれ、おしきられて結局、フンディングに加勢してしまう。ヴォータンも奥さんには弱い！ジークムントは前述のごとく、倒されてしまい、ジークフリートは自分の父親の顔は見る事が出来なかったのである。

ヴォータンに反逆したブリュンヒルデは神性をとりあげられ、人間として生きることになり、岩山にとじこめられる。最初にそこに来た男と結婚しなければならないという。山は火でおおわれ、ブリュンヒルデは眠りにつく。彼女をおこすのは、なんと自分の甥にあたるジークフリートである。伯母と甥の二人が一緒になる。双児の方も大変だが、こっちの方がもっと大変か？血縁のたわむれということになるのか、これも神わざなのだろう。

—————・—————・—————・—————・—————

オペラのはじまりを書く。ライン河は今日もとうとうと流れている。あたりは、霧と雲におおわれ、景色は見えない。音楽は長々とこの様をえがく。ラインの河底に場面はかわる。黄金がねむっている。光とともに、この黄金は目をさます。ラインの乙女が河底でたわむれている。この黄金で指環を作ってもつ者は世界を支配出来るとうたう。どういうわけか、ニーベルングの小人アルベリヒが河底にやって来てこれをききつけ、この黄金をぬすんで行く。彼は地下の工場^{スシ}で黄金から指環を作り、とりあえず、ニーベルングの主になる。ここで題名が分かるのである。

ヴォータンは自分の城を巨人族の兄弟に作らせ、代償として智の女神フライアをやると彼等に約束する。まあ、男社会のあり方そのものである。しかし、城が出来てしまうと、フライアを兄弟にやるのがおしくなる。この辺は人間くさい！何か、かわりになるものと思ったときに、ある神様に「指環」がよいといわれる。さっそく、ニーベルングにヴォータンは行き、アルベリヒをだまして指環をもぎ取ってくる。アルベリヒもとらえられ、ニーベルングの財宝と交換ということではなたれることになる。ヴォータンは巨人に指環と財宝をわたす。アルベリヒも負けてはいない。彼はこの指環に呪いをかけ、これを持つと殺人がそのまわりに起きるというようにした。さっそく、分け前のことで、この兄弟はあらそいをはじめ、弟のファゾルトは兄に殺される。兄のファーフナーはその後、財宝と指環を持って大蛇になり森へ逃げ込む。この大蛇は後にジークフリートによって殺されてしまう。

ヴォータンは、この指環が欲しくなる。結局、話しは前に戻るが、双児の出現となり、彼等に指環をとらせようと目論むのである。ヴォータンは神々の世界支配の欲望を、この双児の結婚により産まれたジークフリートによって実現しようとするのである。ここ迄が結構長い。時代は神代、何が起きてもおかしくはない。

さて、そのジークフリートだが、巨人のファーフナーを倒し、大蛇の血をあび、財宝と指環を手に入れる。どういうわけか、大蛇の血をなめて鳥の声が分かるようになる。そして、ブリュンヒルデが岩山の火の中で眠っていることを小鳥におしえられる。さっそく火の山をめざすが、神はなんでもお

見通しか、ヴォータンはそれを知り、ジークフリートをそこに行かせまいとして自分の槍で行く手をささぎる。しかし、ジークフリートも今は十分に力をつけた男になっていて、神に対抗して、その槍をまっぶたつに折る。ヴォータンは神々の黄昏を感じることになる。ブリュンヒルデとジークフリートは結ばれ愛をかたる。まあ、めでたいのである。

第三夜の「神々の黄昏」はなかなかややこしい。

ジークフリートは指環をブリュンヒルデに渡し、ライン河へむけて旅をするという。何の為に？ここでは突然「ギービヒ家」というラインでの名門の一族が出てくる。冒頭に出た小人のアルベリヒが人間の女性に産ませたハーゲンが成長して、この家にいる。アルベリヒはこの子によって指環をとりかえし、神々を没落させようとしたのだが、なかなかうまくいかなかった。

このハーゲン、なかなか奸智^{カンチ}にたけた、しつこい男で、ジークフリートの持っている宝をねらっている。この家の娘にグートルーネという美人がいる。彼女はたずねて来たジークフリートを好きになってしまう。過去の女性を忘れてしまうという毒薬(?)があってジークフリートはこれを飲まされてしまう。ジークフリートはブリュンヒルデのことを忘れてしまう。まあ、これは神様が仕組んでいるのかも知れない。単なる不倫ではない。

ジークフリートはその家の独身の男性グンターにブリュンヒルデが自分の妻だということを忘れて彼女を紹介する。薬のせいで仕方がない。グンターはブリュンヒルデをつれて来てくれとジークフリートにたのむ。ジークフリートは小人のもっていた「かくれ頭巾」を使い、グンターになりすまして燃えさかる岩山にとってかえす。ブリュンヒルデから指環をうばい、その上で彼女をこの家に連れてくる。まことにおかしい話になって来た！全体として「いばら姫とギリシア悲劇」とをまぜてこしらえているのだろうか。ブリュンヒルデは、ジークフリートにいきなりをぶつけるが、彼は薬にやられており、知らぬ顔である。結局、グートルーネとジークフリートは結婚することになる。不思議なおはなしが出来てきた。

ブリュンヒルデと、グンター、ハーゲンはジークフリートに復讐しようと相談し、ブリュンヒルデはジークフリートの弱点が彼の背中にあることをハーゲンにおしえてしまう。狩に出て悲劇は起こる。

ハーゲンに記憶の戻る薬を飲まされ、ジークフリートは過去を思い出す。ハーゲンにカラスの言っていることを聞いてくれといわれて背をむけたとたん、ジークフリートの背中にハーゲンの槍が突きささる。この辺はあつけない。ジークフリートは死に、ここでブリュンヒルデは今迄あったことが全てヴォータンのさしがねであったことを知る。

ブリュンヒルデはジークフリートの指から指環をぬきとり、ライン河の乙女にかえすという。ライン河のほとりでジークフリートのなきがらは焼かれ、そこに自分も飛び込むので指環も火で浄化されると乙女たちにいう。愛馬グラナーネにまたがり、火の中にとび込んで行くブリュンヒルデ、火は燃えさかる。突然、ライン河が氾濫して、この岸辺の大火が消えて行く。指環を得たラインの乙女達を追って流れにとび込んだハーゲンは流されてしまう。

最後は、この指環はラインの河底におちつく。一方、ヴァルハルの城は、「指環は神々を没落させる」とエルダが予言した通り、トネリコの薪で燃え、神々の時代は終わりに近づく。まことにかわった物語りが19世紀の後半に出来上ったものである。ワーグナーの性格がこれを生むのに適していたのではないか。これは、彼の創作ではないが、ゲルマンのたましいがあって書き綴ったものではないか。

3. 解説

実際の内容はもっと複雑である。通り一遍を書いてみた。一般には、オペラには原作があり、台本書きがいて、作曲家はその台本を見て作曲する。出来上がった段階で上演されることになれば、演出家がいって舞台での歌い手の動きをきめて芝居作りをやることになる。制作者は劇場主になるのか？

この「ニーベルング」はワーグナーが台本から作曲、演出、そして指揮迄やろうとしたもので、当時はまことに（今でも）めずらしいものではあった。

作曲された音楽が素晴らしい。物語りの筋がおかしいところがあるとか、音楽にも統一がとれているわけではないとか、いろいろといわれているようだが、この構想の大きさ、力の逞しさには十分におどろかされる。この音楽の影響は他の国のすべてに及んでいるだろう。

ワーグナーは部分的な場所での男と女の情愛についてはものすごく力を入れて書いている。詞といい音楽といい素晴らしい。彼は、書きながら自分自身がその人物になっているように思える。聴き手をその気にさせるだろう。例えば、ヴォータンが神性をはなれた娘と別れるところは、結構、涙ものである。登場人物の異常さなどは、わすれてしまうだろう。今日の人間感情にしっかりと通じることが19世紀に書かれているのである。一語一語についてメロディーが出来ており、劇音楽の理想をこしらえあげたとみてよい。双児の兄妹の出会いの語りは圧巻か。最後のブリュンヒルデの一人ごと(?)なども格別な気分のものに仕立ててある。

筋道の中味は異常な結婚の連続だが、伝説が基になっているので、これはゆるされるのだろう。あるいは、こんな話しは、ゆるされないという社会もあるかも知れない。伝説の内容は非道德的だが、むかし、むかしのヨーロッパの社会の中では、さほど不思議はなかったのではないか。神代の時代という設定で、我々も一応は納得出来るのだろう。とにかく、この長丁場を堂々とした音楽で表現したワーグナーには誰もが感心させられるのではないか。

4. 作曲法について

ワーグナーは若い時に6ヶ月で当時迄の作曲法をマスターしたという。そして、特にベートーヴェンの音楽をしっかりと研究したとのこと。1870年のウィーンのベートーヴェン100年祭には、第九交響曲の指揮を依頼されている。（ワーグナーは指揮者でもある）もっとも、これはことわったということだが。

このニーベルングでは、ベートーヴェンの作曲法、*cresc. subito piano* というのをふんだんに使って音楽の表情としている。音階はメジャー、マイナーを縦横に使いまわし、転調を多用する。ワーグナーはイタリアやフランスのオペラがあまりにも音楽や舞踊を重んじ、詩や劇の効果について、とぼしいことを不満に思っていたようである。これらのものが全部総合されてこそ、本当のオペラになるということを強調していた。

オーケストラは単なる歌の伴奏であってはならないのである。むしろ、オペラを中心となって音楽作りをやることになる。ライトモチーフ（一つのメロディー）によって劇中の人物をあらわし、又、思想や運命を現わすということで楽劇を作っている。このライトモチーフを対位的に使用して、複雑な音楽を作り出していった。アリアもやめて無限旋律を作り、曲のはこびも一幕を一貫した音楽で作り上げている。19世紀を通してのソナタ形式の音楽を否定するようなものを書きたかったのだろう。これこそ、交響曲だといいたかったのではないか。

5. 作曲の経過について

1852 年 ワルキューレ、ラインの黄金の台本が出来る。

1871 年 ジークフリート完成

1872 年 神々の黄昏 完成

1876 年 8 月 13 日 14 日、16 日 17 日 全曲の初演が、バイロイトで行われた。指揮は自分でやらず、ハンス・リヒター (Hans Richter) にまかせる。

舞台装置はホフマン (?) のデザインという。結構、素晴らしいものであったようである。ワーグナーは演出を担当した。この演出法が今日も続けられているのかどうか。コジマが夫の亡くなったあとをひき継いだことはたしかである。

下世話なことながら収支決算はどうなったのだろう。練習の回数も相当なもので、オーケストラのメンバーや歌手にはどの位支払ったのかを知りたいものである。上演の様子が何か目に見えるような感じが私はするのだが、浄瑠璃の義太夫語りが汗水をたらして声をしぼり出し、太棹の三味線がしっかりとそれを支える。こんな状態がニーベルングの演奏に見られるように思うのである。このことは、多分、そうとう観客を引きつけるのではないか。

前に戻るが、1848 年「若きジークフリート」の台本を書き上げている。その後の作曲はすぐにはなされていない。1854 年には「ラインの黄金」の作曲が終わっている。作りはじめから、とにかく四日間で見ることの出来るものということを考えていたようであるが、大変なものを作り出したものである。ピアノ・スコアが出来て、それを管弦楽化するのにも十分に日数はかかる。1856 年には「ジークフリート」の作曲をはじめた。ニーベルングを作りながらオペラ、トリスタンやニュールンベルクを作曲しているから大した体力の持主であることが分かる。ワーグナーは「三日と一晚の序夜のための舞台祝典劇」と表題に書いている。

6. 印刷について

楽譜や台本がすぐに印刷されるというのはたいしたことなのである。とにかく、全編すべてが印刷されている。

1861 年「ショット」からラインの黄金のピアノ・スコアが出版された。

1862 年 ライプチヒでニーベルングの「台本」全部が印刷された。

1865 年 ワルキューレのピアノ・スコア

1871 年 ジークフリートのピアノ・スコア

1873 年 ラインの黄金のスコア

1874 年 ワルキューレのスコア

1875 年 神々の黄昏のピアノ・スコア

1876 年 ジークフリートのスコア

神々の黄昏のスコアが出版された。

出版ということは、買手がいるということである。出版社もこれだけのものが売れなければ大変なことになる。よく売れたのだろう。

7. 演出上の問題点

ワーグナーの音楽は、いろいろな場面を舞台に作らなくても、その気分がよく分かるように書かれているので「抽象的」な舞台でも成立するのではないか。聴衆としての期待を次に書く。

- a. 最終のライン河畔での火の扱い。薪はどのように燃えるのか？
- b. 河の水があふれてくるという。火は消えてよいのだが、むずかしいだろう。
- c. 同時に河底の平穏を見る。
- d. ライン河全体の情景が分かるか。
- e. ブリュンヒルデが馬にのって火の中にとび込む様。
- f. 「ワルキューレ」をステージでとばそうとすると、ほとんど手品の世界の出来事になるだろう（奇術）。とにかく大がかりなものではないのか？

8. 劇の音楽について

今日、TV ドラマの音楽も、しっかりと色濃く書かれ、よい演奏が流れてくるものもあるが、概ね、メロディーとハーモニー、それに一寸したリズムで、いわゆる薄く書かれた音楽がほとんどである。お金とのかねあいもあって、これはこれで良いのかも知れない。

劇場音楽ともなれば、ワーグナー的な感覚でしっかりと書かれ、そして、よい演奏が欲しい。ワーグナーは冗談めいた部分、例えば、芝居の冒頭部に出て来る雷の神様ドンナーの歌もなかなか面白く、又、風格もそなえた音楽に仕立ててある。

問題点としては、この楽劇のはじまりで幕前のいわゆる前奏曲があるが、長すぎないか。私は、あきてしまった。ワルキューレの飛翔も前奏曲としては一寸長すぎか。又、ジークフリートの葬送の終わりは余計に思う。まあ、いろいろなことがあっても、この楽劇は 21 世紀も続けられて行くのだろう。

9. 指揮について

オペラの指揮というのは妙に神経を使う。

これから見ると器楽合奏などは、ほとんど何もしなくても成立する。とにかく、オペラの場合は、オーケストラを自分の手足のごとくに使うことが出来なければならないのである。

歌手とも打ち合わせが必要である。問題はテンポだろう。音楽の中でのリタルダンドは指揮者にとってはなかなか大変なところである。テンポが速くなったり、遅くなったりというところが沢山あると、これを指示するのにかなり神経を使うことになり、相当につかれる。

管弦楽のスコアから良いテンポがどうやって作り出されて行くのか。次の楽語は第一夜の「ワルキューレ」の第一幕第三場からとり出した速度標語である。

Mässig langsam 中庸に遅く、Lebhaft 生氣ある、Breit ゆっくりと、Sehr schnell 速い、Sehr belebt 生き生きと、Immer schneller 常に速く、Mässig bewegt 急いで、等であるが、この標語だけでテンポはきまらない。歌詞の内容とメロディーを考えて指揮者はテンポを作り上げて行く。

歌い手は歌い手で、それなりにテンポをもって歌ってくる。それがよければそのテンポでやって行くことになる。オペラの面白さは、歌にオーケストラがしっかりとむすびつき、しかも、歌と伴奏の音量のバランスがとれてよいひびきが会場に出た時に分かるだろう。指揮者は、オーケストラは、その辺のことをしっかりと分かってその場を過ごすことになる。歌い手が、なんでも勝手にうたい、そ

れにあわただしくオーケストラがついて行くなどということであってはならない。指揮者の作った、ちゃんとしたテンポ（オペラが成立するテンポ）で、時間が流れて行かなければならないのである。その中で歌手はリズムをうたい、しっかりと言葉を表現しなければならないのである。そして、歌声が会場にしっかりとひびくことが重要なのである。

10. 後記

ワーグナー研究の一端としてこの楽劇のほんの一部に手をつけてみた。ワーグナーについては、彼の生涯、生活、作品など、いろいろな面から見る事が出来るだろう。今回はニーベルングの私の持ち分を私なりに理解してここに書いたが、機会があれば他の部分についても分析してみたい。

なにしろ 15 時間かかるオペラである。全貌が簡単に分かることはないだろう。まあ、少しずつというところか。

2010 年 7 月 4 日

於いて 北ノ沢

文献

1. バイロイト音楽祭の 100 年

(1965 年－ 1976 年) ジョフリー・スケルトン

訳 山崎 敏光

1976 年 12 月 10 日 発行 音楽之友社

2. 名曲解説全集 13 歌劇 上

1961 年 2 月 10 日 発行 音楽之友社

3. Conductor's score

Richard Wagner

Der Ring des Nibelungen

EDWIN F. KALMUS & CO., INC. (年代不詳)

4. DVD

• ニーベルングの指環

指揮 ダニエル・バレンボイム

合唱とオーケストラ バイロイト祝祭劇場 (1991 ～ 1992-6 月－ 7 月)

出版 ワーナー クラシック

発行 2007 年 6 月 27 日

• ニーベルングの指環

指揮 ブービン・メータ

バレンシア州立歌劇場

発行所 世界文化社

発行 2010 年 7 月 5 日 初版

追記

北海道交響楽団は創立 30 周年記念として、ワーグナーの楽劇「ニーベルングの指環」を前述の通り、10 月 24 日（日）に札幌コンサートホールで堂々と演奏した。東京から山本真由美ソプラノ、福田祥子ソプラノ、角田和弘テノール、岡元敦司バリトンの 4 氏を招聘しての舞台作りで、オーケストラボックスをステージ上にしつらえた。抜粋ではあるがワーグナーの本質を表現し得たと私は思っている。

この催しは、札幌にクラーク博士が農学校の教頭として着任し（1876 年 8 月）賛美歌をうたってから今日迄の札幌の音楽の歴史の一つの到達点だと私は思っているのだが、我が国でもアマチュアがワーグナーにいどむのは初めてのことであり、日本の音楽史の中での重要な出来事として、とり扱われてよいのではないか。

当日、終演後に回収された聴衆からのアンケートからその内容を少し書き加える。

－ 2010 年 11 月 4 日－

- クオリティが非常に高い。もっともっと聴いていたかった。
- とくに金管がすばらしかった。
- 練習を積まれた成果を感じました。
- アマチュアでこれだけ長時間に渡る演奏が出来ることはすばらしい一言につきます。
- 感動した。
- こんなすばらしい演奏を聴かせていただきありがとうございました。
- これだけの大曲を、しかも大規模に演奏した道響の力は素晴らしい。
- すごく盛り上りました。第二部のはじまりは胸があつくなりました。

以上 2010 年 10 月 24 日

Consider on Wagner's work

KAWAGOE Mamoru

Abstract: This is a report that I wrote on my personal opinion of music drama 「Der Ring des Nibelungen」 , composed by R. Wagner, and on the story of this opera.